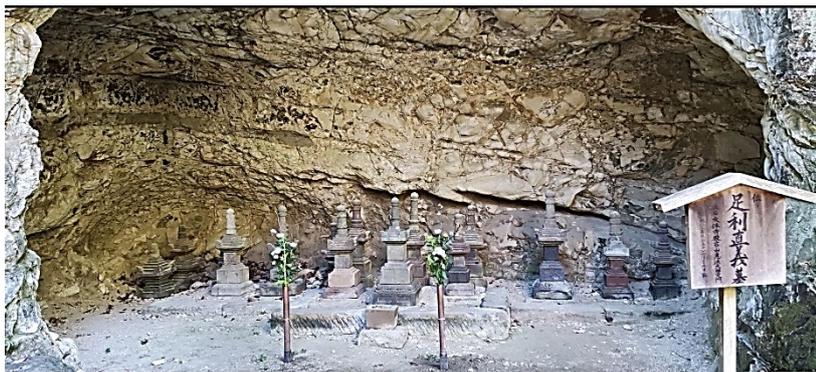


Q4 品濃町の歴史は一体いつ頃の時代まで遡れるのでしょうか？

A

- ・少なくとも江戸時代までは遡れるに違いないと考え、確かな根拠となる本を探してみました。どんぴしゃりの本がありました。江戸時代に相模国について書かれた地誌に、『新編相模國風土記稿』という本があることが分かったのです。昌平坂学問所地誌調所が文政7年(1824)から調査を開始し、天保12(1841)年に完成した地誌です。文化7年(1810)から編纂事業を開始し、天保元(1830)年に完成した『新編武蔵風土記稿』に次ぐ本です。幸い、国立国会図書館デジタルコレクションによって読むことができます。
- ・巻数は全126巻で、メインの相模国の各郡・県の姿は第12巻から第125巻までに掲載されています。当時、相模国には9つの郡・県がありました。足柄上郡、足柄下郡、淘綾郡、大住郡、愛甲郡、高座郡、鎌倉郡、三浦郡及び津久井県です。因みに、「津久井県」は誤植ではありません。江戸時代を通じて、地域区分の単位として「県」を称した全国で唯一の例です。
- ・「鎌倉郡」には、このうち第69巻から第106巻までがあてがわれています。鎌倉郡は「山之内庄(71村)」、「西目庄(9村)」、「深沢庄(10村)」及び「江島」で構成されていましたが、71村を抱える最大の「山之内庄」には第70巻から第103巻までがあてがわれています。山之内庄の巻を繙くと、「鶴岡」、「山之内村」、「雪の下村」といった順で掲載されており、「品濃村」は第101巻に収まっています。この巻には、永谷上村、永谷中村、上柏尾村、下柏尾村、平戸村、品濃村、前山田村、後山田村、秋葉村、名瀬村、上矢部村、宮沢村、中田村、和泉村、阿久和村、岡津村の16村が収録されています。
- ・品濃村を見ると、先ず「江戸より行程9里」とあり、続いて「永谷郷に属す。古昔は秋庭郷に属せり。」とあります。今は鎌倉郡山之内庄永谷郷に属しているが、昔は秋庭郷に属していたというのです。その根拠に挙げているのが、円覚寺の所蔵する建武以来の古文書です。建武3(1336)年の制札、建武5(1338)年の裁許状、貞和元(1345)年の安堵状を挙げています。そこに、明確に「秋庭郷内信濃村」と書かれているというのですから、これほど確かなことはありません。このことによって、品濃村は建武3(1336)年までは確実に時代が遡れることが分かりました。
- ・しかし、もっと時代を遡ることはできないのでしょうか。
- ・実は、『新編相模國風土記稿』には「弘安の頃は名越長福寺の所領たり。建武元年8月足利直義この地を建長寺中正統院領に寄附あり」と書かれているのです。こ



の点について調べてみると、直義は、先ず弘安7(1284)年の安堵状によって品濃村は鎌倉期以来名越長福寺領であることが確認し、そこで長福寺に替地を与えることによって正統院に品濃村を安堵したという経緯があることが分かりました。

- ・また、こういう古い言い伝えもあります。すなわち、円覚寺の祖となった無学祖元は、弘安2(1279)年に北条時宗の要請に応え中国から渡来しましたが、鎌倉に向かう途次、品濃村の一草庵に草鞋を脱ぎ、衣を改めて鎌倉に入ったといひます。その一草庵こそ北天院の前身ですが、この古伝からも、弘安2(1279)年には品濃村が存在したことが裏付けられます。
- ・結局、古文書に拠る限り、品濃村は、今から約740年前、鎌倉時代の弘安7(1284)年まで遡れることが証明できたわけです。実に嬉しいことではありませんか。
- ・ここで序ながら、品濃村が属していた「山之内庄(荘)」についてももう少し詳しく触れてみましょう。『百科事典マイペディア』は以下のように記しています。

「立荘の時期などは不明だが、鎌倉時代初頭には後白河院領で、その後長講堂領となり、持明院統に伝領された。山内荘は代々源氏の家人であった山内首藤氏の本領であった。1180(治承4)年の源頼朝挙兵の際、山内首藤経俊は平家側についたため、頼朝が勝利したのち山内荘は没収されて、土肥実平に与えられたらしい。1213(建暦3)年の和田合戦後は北条得宗領に組み入れられた。鎌倉幕府滅亡後は足利直義領となり、荘内の各郷は鎌倉の各寺院や足利氏重臣に分給された。荘内には岩瀬郷・吉田郷・舞岡郷・秋庭郷・富塚郷・長尾郷・山崎郷などがあつた。」
- ・鎌倉七口の一つに鎌倉と山之内庄をつなぐ「巨福呂坂切通」がありますが、ここに「切通」があるということは何を意味しているのでしょうか。切通ができる以前は、鎌倉と山之内庄は山によって隔てられていたことを物語っています。このことは重要なことを意味します。作家・永井路子は「山内荘つまり鎌倉の背後を押さえるという意味で、鎌倉と一帯になっている要地」(『相模のものふたち』)と記し、学者・大山喬平は「和田合戦の論功行賞で北条義時が鎌倉の背後に広がる山之内庄をおさえたことは、鎌倉幕府が北条氏の保護下に入ったことを物語る」(『日本の歴史9鎌倉幕府』)と記しています。山で隔てられていたが故に、鎌倉を守る上で、山之内庄が軍事上如何に重要であったかが分かります。巨福呂坂切通は仁治元(1240)年になって北条泰時によって開かれました。
- ・以上を踏まえると、鎌倉時代、わが品濃村は軍事上大変重要であった山之内庄に属し、しかも武蔵国と境を接する国境の地に位置していたということは、大変大きな意味を持つのではないかと思われてなりません。